

# 近世における墓標と墓地設備の石材利用について

## On the use of stone for grave markers and cemetery equipment in the early modern period

田中 稔

TANAKA, Minori

大阪大谷大学大学院

(Graduate School of Osaka Ohtani University)

### Abstract

In the cemetery space, there are two main types of early modern stone sculptures: the first is cemetery equipment. The second is grave markers. Grave markers make up a large part of the cemetery and are erected by individuals or families. This paper examines the use of stone materials in early modern stone structures, focusing on cemetery facilities and the stones used for grave markers, which were constructed in the same period but of different character. As for the cemetery facilities, I conducted a survey of stones used for cemetery facilities in the northeastern part of Nara City of Nara Prefecture and Nabari City of Mie Prefecture. As a result, tuff and granite from the locality or nearby areas were used for cemetery facilities. On the other hand, the use of Izumi sandstone for grave markers was noted (KUTSUKI, 2004; SATO, 2009), indicating that stone types were different between grave markers erected at the same time by mass production and cemetery facilities built at one time in the cemetery. This may be because funeral rites involving cemetery facilities are rooted in the local community, and therefore, people of the community may have found the meaning in the use of stones occurring in the community area rather than stones brought from the outside.

### 要旨

墓地空間には、大きく2種類の近世石造物が存在する。1つ目は、墓地設備である。村落単位などで行われる葬送儀礼のうち埋葬前の最後の儀礼に使用するために製作された公的なものである。2つ目は、墓標である。墓標は墓地の大部分を占めており、個人または家単位で造立されるものである。

本稿では、同時期に造立されつつも性格を異にする墓地設備と墓標の使用石材に着目し、近世石造物の石材利用について検討を行う。墓地設備については、先行調査地域である奈良市北東部・三重県名張市で墓地設備の使用石材に関する調査を実施し、その結果、在地または近接地域で採れる凝灰岩・花崗岩の使用がみられた。一方、墓標には、搬入石材である和泉砂岩の使用が指摘されており（朽木, 2004；佐藤, 2009）、同時期に造立され大量生産が必要な墓標と墓地に1つ単位で造られる墓地設備では異なる石材を使用することが分かった。

これは、墓地設備を伴う葬送儀礼が地域に根付くものであるため搬入石材ではなく、地域で採れる石材を使用することに意味を見出したのではないかと考えられる。

## 1. はじめに

以前、南山城や大和地方の東山中に分布する石造物の踏査に参加した際、墓地で葬送に関わる一定の空間が存在している事に気がついた。その空間には石造物が間隔を空けて配置されており、このような光景の墓地が幾つか存在していた。研究史をみると、藤澤典彦により墓地設備という名称で分類が行われていた（藤澤・守屋，1989；藤澤，1996，2004）。

この墓地空間には、大きく2種類の近世石造物が存在する。1つ目は、上記の墓地設備である。基本的に墓地に1つ存在し、個人のために製作し使用するものではなく、村落単位などで行われる葬送儀礼のうち埋葬前の最後の儀礼に使用するために製作・使用された公的なものである。造立主体には、「念佛講中」や「村中」<sup>むらじゅう</sup>などが多くみられる。なお、墓地設備の具体的な使用方法については以下で詳述する。2つ目は、墓標である。墓標は墓地の大部分を占めており、個人または家単位で造立されるものである。

本稿では、同時期に造立されつつも性格を異にする墓地設備と墓標の使用石材に着目し、近世石造物の石材利用について検討を行う。検討するにあたり、先行調査地域である奈良市北東部・三重県名張市で墓地設備の使用石材に関する調査を実施し、その調査成果と隣接地域の墓標の使用石材に関する先行調査成果の比較を行うこととする。

## 2. 研究史

近世葬送墓制研究では、墓上標識である墓標を中心に研究が進められてきた。本格的な墓標研究の嚆矢となるのは、坪井良平の「山城木津惣墓墓標の研究」（坪井，1939）である。京都府相楽郡木津町所在の木津惣墓において、約3300基の墓標の悉皆調査を行い、墓標の形式分類、造立推移を検討する。その後、木下蜜運が坪井に倣い元興寺極楽坊の板碑群の研究を行い（木下，1967）、横山浩一が「型式論」を述べるにあたり、先駆的な山城木津惣墓の調査成果を基にセリエーショングラフを用いた分析を行っている（横山，1985）。これらの調査研究方法は、白石太一郎・村木二郎に引継がれ、大和の郷墓において組織的なレベルの悉皆調査が行われた（白石・村木

[編]，2004）。また、山城南部では、朽木量が淀川・木津川流域において墓標と使用石材に関する調査研究を行い（朽木，2004）、三重県の鳥羽市堅子地区・千賀地区で元興寺文化財研究所が墓地の総合調査研究を行っている（佐藤，2009）。最近では、三好義三がこれまで蓄積されてきた全国の近世墓標の調査・研究を集成し、各地域の様相等をまとめている（三好，2021）。

次に、墓地設備の調査研究についてみていく。1980年代に元興寺文化財研究所が実施した墓地の総合調査が始まりである。ここで墓寺や墓寺の本尊、供養塔などに加え、墓地全体の構成に関わるものとして墓地設備を調査対象としている。さらに、墓地内の構成物だけでなく、文献史学や美術史の視点からの調査成果、葬送習俗に関わる民俗調査なども踏まえた葬送墓制研究を行う（元興寺文化財研究所[編]，1984，1985）。

その後、奈良盆地の北部とその周辺部、隣接する伊賀地域で実施された石造物調査においても、墓地の構成要素として報告されている。藤澤典彦を中心に墓地設備の構成要素、形態の特徴、年代分布の傾向などが示される（藤澤・守屋，1989；藤澤，1996，2004）。

他にも墓地設備の個別具体的な研究として、岡本広義の奈良盆地、山城南部所在の棺台に関する研究（岡本，1997）、谷戸実が実施した伊賀地域の六地藏の調査研究が挙げられる（谷戸，2021）。

これら、2種類の近世石造物のうち墓標については、全国各地で悉皆調査が実施され、様々な視点からの研究がみられるが、一方の墓地設備に関しては墓地を構成する上で重要な要素であるにも関わらず、調査研究が殆ど進んでいないのが現状である。

## 3. 墓地設備の使用法

筆者は、2022年7月末、奈良市大柳生町上出垣内の葬送儀礼に関する聞き取り調査を行った。その調査成果を基に墓地設備の使用法について詳述する（田中，2023）。上出垣内では、平成17・18年（2005・2006）頃まで土葬が行われており、その時期まで墓地設備を伴う葬送儀礼が行われていた（第1，2図）。

墓地設備は埋墓に置かれており、野辺送りの一行



第1図 法要を行う空間（棺台・前机・迎え仏）奈良市大柳生町上出垣内，2022年9月20日筆者撮影。



第2図 六地藏 奈良市大柳生町上出垣内，2022年9月20日筆者撮影。

が到着すると、入口にある六地藏の前に辻口ソクを立てて松明で火をつける。そして、六地藏の前を通過して埋葬前の法要を行う場所に向かう。なお、埋葬の入口に竹の門を作る習慣や鳥居はみられない。

法要を行う空間には、入口から順に棺を安置する棺台、供え物等を置く前机が並び、前机の向かって右側に迎え仏がたつ。棺台の上に棺と直行するように間隔を空けて藁を2把並べる。寝棺、座館共に棺台の上方で右回りに3回半周り、棺の底に竹を通した状態で安置する。寝棺の場合は、前机側が死者の頭となるように置く。

棺を置いた後、前机に手前から順に焼香道具・法界に入れて運んできた脚付の膳、空いてる場所に位牌を置く。なお、脚付の膳にはコップ1杯の水、茶碗に山盛りに盛った白米に箸を1本刺したもの、何品かのおかずがのる。

導師は、前机の前に立った状態で棺台の方を向き、左手に珠数をかけた状態で右手に持った散杖で供え物などを叩く仕草をした後、小さい鐘を鳴らしながら読経を行う。その間、参列者は入口からみて前机の向かって左側に立っており、焼香が始まると、導師は脇に立ち参列者が順番に焼香をする。この時、迎え仏に法要は行わず供え物等も置かない。なお、埋葬以降のお参り時には、六地藏・前机・棺台・迎え仏を使用せず、法要も行わない。法要を終えると導師に続き、参列者が帰路に着く。その際、喪主を含めた遺族2名が六地藏の向かいに藁を敷いて座

り、墓道を通って帰宅する参列者に頭を下げる。また、火葬に移行してからは野辺送りや埋葬での法要は行っていない。

このように、墓地設備は埋葬の葬場を形成するものであり、迎え仏を除き一連の葬送儀礼に直接使用されるものである。

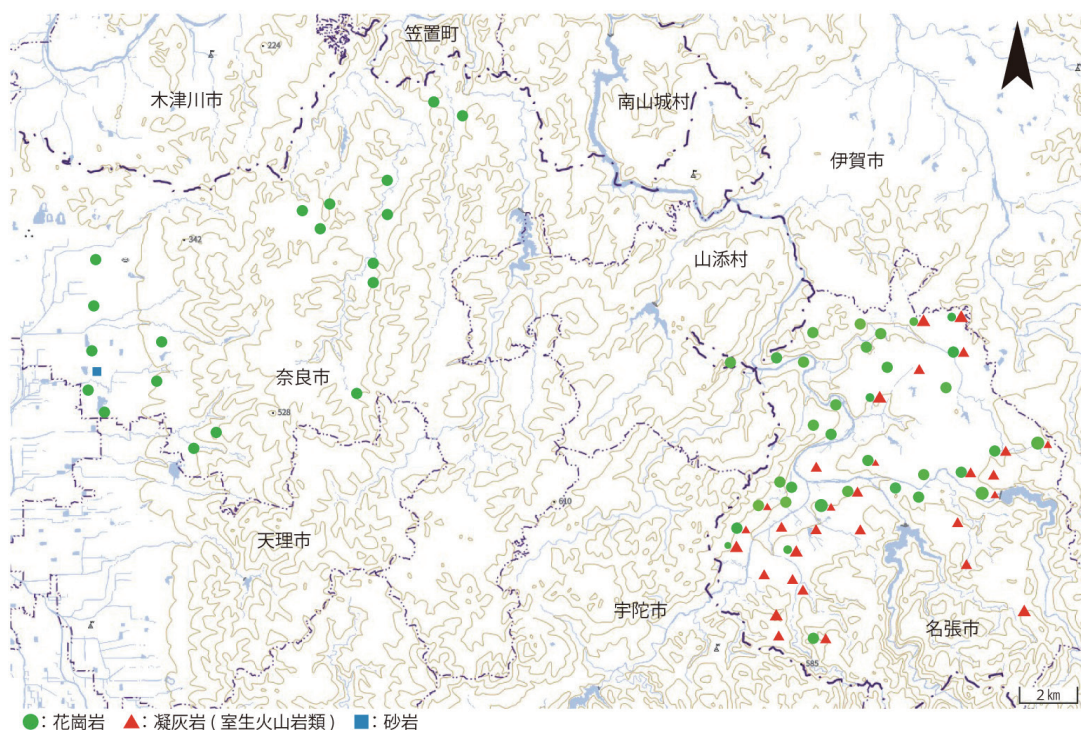
#### 4. 近世墓標と墓地設備の造立傾向

近世墓標の主要形式の変遷について前段階の五輪塔類が簡略化され、背光五輪塔などが出現し、さらに仏教的な要素が薄れた梵字・戒名・月日のみを刻む舟形へ移り変わり、その後、最も非宗教的な櫛形・角柱形が出現する（坪井，1939）。また、墓標の全体的な造立傾向については、17世紀中頃までに継続した造立をみせ、18世紀前半に一気に造立数が増加する傾向がみられ、その背景に造立者層の拡大が指摘されている（三好，2021）。

そして、墓標の造立が一般化する17世紀末～18世紀初頭にかけて、畿内をはじめ全国で頭部が弧状を呈する櫛形墓標が出現するという斉一性の現象が起こる。

一方、墓地設備は、17世紀後半から顕在化し、18世紀初頭にピークを迎え、18世紀を中心に造立が行われている（藤澤・守屋，1989；藤澤，1996・2004）。この造立推移は、上記の墓標の造立が一般化し、櫛形墓標の斉一性がみられる時期と符合する。

また、墓地設備にみられる形態的特徴として、六



第3図 奈良市北東部、三重県名張市における墓地設備の使用石材分布状況（国土地理院地図を基に筆者作成）

地蔵、迎え仏は、舟形の光背をもつ地蔵が多く、棺台は基本的には円形の蓮華石座であるが、方形、自然石形なども存在する。そして、前机は、一般的に机状を呈するが方形、自然石形のものもみられる。今後、無銘の資料については、資料化を進め、形態や構造の変遷を把握し、紀年銘資料との照合、造立年次が不明な資料の位置づけの考察が課題である。

### 5. 近世墓標と墓地設備の使用石材

墓地設備の使用石材を検討するにあたり、先行調査を踏まえ奈良市北東部で20ヶ所・三重県名張市で50ヶ所の墓地で調査を行った。なお、中世石造物の転用品、近代の年号を有するものは調査対象外とした。

第3図は、墓地設備の分布ならびに墓地設備の使用石材を表した地図である。緑色の丸は、花崗岩製、オレンジ色の三角は凝灰岩製であることを示している。記号が1つの場合は、墓地設備に使用される石材が1種類であること、2つ並んでいる場合は、2種類であることを示している。また、墓地設備の中で、使用さ

れる石材の割合が多い場合は、記号を大きく表記している。

調査の結果、主な使用石材は花崗岩と凝灰岩であった。これらの分布状況をみていく（第3図）。まず、奈良市北東部では花崗岩が9割以上を占めており、付近の木津川流域が「領家帯」と呼ばれる花崗岩地帯に属しており、また隣接地域である天理市所在の龍王山が花崗岩産出地であることと関係している可能性がある。

次に、三重県名張市域内をみていく。北西部の奈良県山辺郡山添村の県境付近では花崗岩が使用されており、宇陀市室生の県境付近の南西部や伊賀市付近の北東部では、花崗岩と共に、凝灰岩がみられる。特に、宇陀市室生の県境付近や南西部では、凝灰岩のみを使用する傾向があり、地質学的に「室生火山岩類」と呼称される。宇陀市室生、名張市赤目四十八滝、香落溪、宇陀郡曾爾高原に分布が集中するため、この付近に凝灰岩製が多い要因であると考えられる。

では、墓地設備の調査を行った近接地域における墓標の使用石材についてみていく。朽木 量は木津川流域の墓地調査の結果を踏まえ、全国の傾向と同様で17世紀後半に櫛形墓標が出現し、春日山から産出する在地性の安山岩から大阪府泉南地方で産出する和泉砂岩の使用がみられ、相関して変化すると指摘する(朽木, 2004)。

また、上記と異なる流域であるが三重県内鳥羽市堅子地区、千賀地区では、櫛形墓標が17世紀末～18世紀初頭に出現後、18世紀・19世紀に盛行し、その時期は主に砂岩がみられる。また、墓標の悉皆調査に加えて砂岩の産出地に関する分析も行っており、搬入石材である和泉砂岩もしくは在地産の砂岩、またはその両方の使用を指摘する(佐藤, 2009)。

## 6. まとめ

今回の検討結果から、同時期に造立され大量生産が必要な墓標と墓地に1つ単位で造られる墓地設備では異なる石材を使用することが分かった。

まず、墓標については、三重県では断定できないが、朽木 量は、「木津川流域の墓地では、17世紀末～19世紀にかけて、墓標の造立拡大に伴い、量産可能な形態であり、加工が容易な和泉砂岩製の櫛形墓標の造立が行われ、この背景に和泉砂岩を供給する石材流通の体制の確立がある」と述べている(朽木, 2004)。

一方、墓地設備は地元で産出される石材もしくは近接地域の石材を使用する傾向があり、墓標のように組織的な流通体制の中で石材の選択が行われてこなかったと推定できる。これは、墓地設備を伴う葬送儀礼が地域に根付くものであるため搬入石材ではなく、地域で採れる石材を使用することに意味を見出したのではないかと考えられる。

今後の課題は、墓地設備の調査を行った奈良市北東部や三重県名張市において墓標の悉皆調査を実施し、墓標の形式変遷や石材変遷を踏まえ、墓地設備の造立時期や使用石材を評価する必要がある。そして、墓標と墓地設備で異なる使用石材を選択した社会的背景についても追求していく必要がある。

## 文献

- 岡本広義(1997):蓮華石座について—奈良県北部を中心に—。『東アジアの味覚と視覚—ロータスをめぐって—』, 45-51, 元興寺文化財研究所人文・考古学研究室, 奈良。
- 元興寺文化財研究所[編](1984):『—昭和五十八年度日本自動車振興会補助事業による—近畿における中世葬送墓制の研究調査概報』。63ページ, 元興寺文化財研究所, 奈良。
- 元興寺文化財研究所[編](1985):『—昭和五十九年度日本自動車振興会補助事業による—近畿における中世葬送墓制の研究調査概報(昭和五十九年度)』。75ページ, 元興寺文化財研究所, 奈良。
- 木下密運(1967):元興寺極楽坊板碑群の調査研究—その形式的変遷を中心として—。元興寺仏教民俗資料研究所年報1967, 6-32。
- 朽木 量(2004):『墓標の民族学・考古学』。272ページ, 慶應義塾大学出版会, 東京。
- 佐藤亜聖(2009):『熊野灘沿岸地域を中心とした中世・近世葬送墓制の研究』(平成18年度～20年度科学研究費補助金研究調査報告書)。73ページ, 元興寺文化財研究所。
- 白石太一郎・村木二郎[編](2004):『大和における中・近世墓地の調査』(国立歴史民俗博物館研究報告111), 637ページ, 国立歴史民俗博物館, 佐倉。
- 田中 稔(2023):葬送儀礼に関する調査報告—奈良市大柳生町上出垣内の事例を通して—。大阪大谷大学大学院歴史文化学論叢, 第4号, 1-12。
- 谷戸 実(2021):『伊賀地域 石の六地藏 拓本集』。172ページ, 私家版。
- 坪井良平(1939):山城木津惣墓標の研究。考古学(東京考古学会), 第10巻第6号, 310-346。(『歴史考古学の研究』[ビジネス教育出版社, 1984]所収)
- 藤澤典彦・守屋 薫(1989):墓地設備。『奈良市石造遺物調査報告書—解説図版編一』, 35-37, 奈良市教育委員会, 奈良。
- 藤澤典彦(1996):墓地設備。『生駒市石造物調査報告書』, 30-34, 生駒市教育委員会。
- 藤澤典彦(2004):墓地設備。『上野市史 文化財編』, 679-686, 上野市。
- 三好義三(2021):『考古調査ハンドブック21 近世墓標』。247ページ, ニューサイエンス社, 東京。
- 横山浩一(1985):型式論。『岩波講座 日本考古学第1巻 研究の方法』, 43-73, 岩波書店。

